

貞観十一年(869年)地震・津波と推定される津波の波源域(総括)

日本気象協会東北支局* 渡邊 健夫

The Earthquake and Tsunami Occurred in 869(Johgan 11), and Tsunami Source

Hideo WATANABE

Japan Weather Association, 4-20-14 Mukaiyama, Taihaku-ku
Sendai, Miyagi, 982-0841 Japan

Some results on the Johgan earthquake and tsunami have been obtained from Nihon Sandai-Jitsuroku (formal report edited by the Japanese Government) and many traditions on earthquakes and tsunamis in Miyagi, Fukushima and Ibaragi Prefectures, the northeast Japan, are as follows. 1) The area of the strongest intensity of the earthquake occurred in 869 (Johgan 11) is the boundary of Fukushima and Ibaragi Prefectures. 2) Twenty-six tradition shown probable invasion of the tsunami are obtained in the three prefectures. 3) The destructive tsunami has attacked the coasts of three prefectures. This has been also supported by Prof. Minoura's study on the tsunami deposits. 4) It is presumed that the tsunami source area is length 200km and width 50km along the Japan Trench off the northeast Japan.

§ 1. はじめに

貞観津波の研究については阿部・他(1990)の論文がある。関連した研究として今村(1941), 箕浦(1990), Minoura et al. (1991)、飯沼(1995)および千釜・他(1998)の論文や著書がある。

筆者も貞観地震・津波について、2つの論文(渡邊, 1998および2000)を発表した。これらによると、唯一の正史『日本三代実録(以下実録と略称)』に記載されている地震・津波の場所は宮城県多賀城市ではなく、名取軍団があった宮城県岩沼市か陸奥国境で、津波の波源域は宮城県と福島県の沖合の三陸沖か、さらに南にまたがる宮城県から茨城県までのはるか沖であろうと推定した。一方、波源域が仙台湾内にあったという見方もある(羽鳥, 1998)がどうであろうか。

今回は史料を総点検し、次のことを行なった。1) 実録に関連する事項を再度検討、2) 伝承の成り立ち、信憑性などから採用の可否を判断し、岩手県沿岸南部から茨城県沿岸

*〒982-0841 仙台市太白区向山4-20-14

の 67 の各県、郡、市、町、村、旧町、旧村の史（誌）料その他から貞観津波に関連すると推定される伝承（物語）を選び出し検討、3) 貞観津波が記述されているいくつかの文献（著書）を詳細に調査した。この中には政治・社会に関するバックグラウンドのほか、伝承（物語）の記述が多数を占めている。このようにして得られた津波の実態から津波の波源域と形成のメカニズムを推定した。

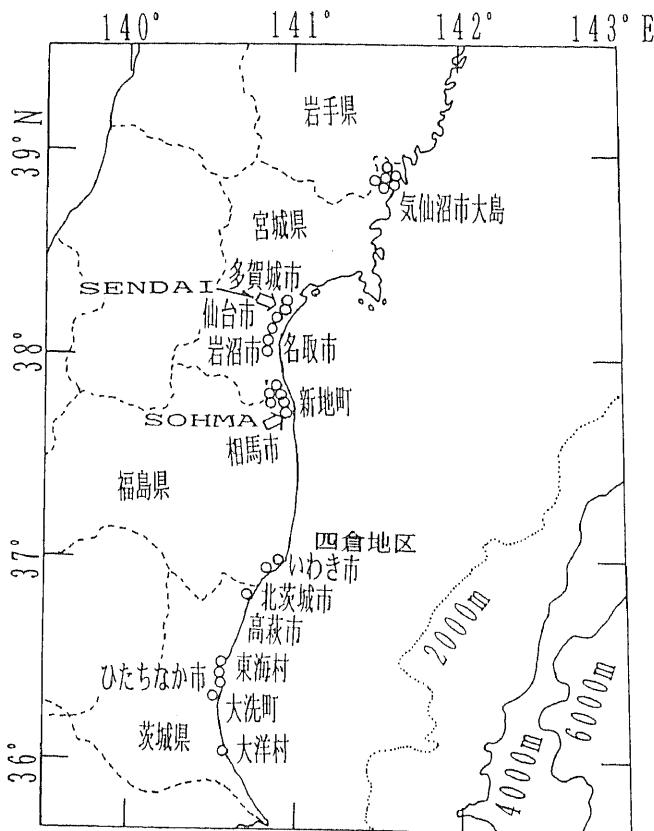
以上の結果、唯一の正史からは全体像を得ることは難しいので、若干精度が落ちても数多くの伝承から少しでも実像に迫ろうという試みが本研究である。なお、箕浦教授の御好意により、仙台平野と福島県相馬市の津波堆積物の研究結果も加味して検討した。

§ 2. 実録の検討（付録－1）

貞観地震・津波についての論文、著書などはすべて付録－1に見られる貞観十一年五月二十六日の実況報告のみで論じられている。しかし、その後同年九月七日地震を検する使を、同年十月十三日天皇の詔が発せられている。これらを見ると、1つの大きな相違がある。

五月の報告に「陸奥国大に震動りて」とあったのが、十月の詔では「陸奥国境に、地震尤も甚しく」となっている。九月に地震・津波調査のため使を派遣していることを考えると、五月の取り敢えずの狭い地域の報告から、十月に調査した五月より広い範囲の報告である。ここで、辞典（例えば広辞苑、1991）によると、『境』には地域とか範囲という意味があり、五月の「陸奥国」も「陸奥国境」も同じことを言っているのではないかという考え方がある。すると、十月の「尤も」という表現がおかしくなる。したがって、陸奥国境は陸奥国と同じであるとは云えない。まして天皇の詔の権威を考えると、この文面どおりに読むのが妥当であろう。すなはち、陸奥国境が地震動最大であり、津波も大きかったことが記述されている。この場所は朝廷側から見れば、現茨城県沿岸北部〔多賀郡多珂城：現高萩市（中津、1999）〕、陸奥側から見れば、福島県沿岸南部〔現いわき市（藤原、1995）〕であろう（図－1参照）。したがって、実録の記述は宮城県多賀城市〔当時は多賀城という地名はなく、国府多賀か多賀（柵）のことであろう（渡邊、1998）〕付近の地震・津波であったとする論文や著書は疑問である。

当時の社会・政治情勢を見ると〔実録、各県市町村史（誌）、中津（1999）、高橋（2000）、桑原・他（2000）〕、地震・津波発生時（9世紀中頃）、国府多賀にあった陸奥鎮守府は前線基地胆沢城（岩手県水沢市）に移され、多賀国府と胆沢城鎮守府を上から統括するための按察使は、都（京都）に留まって多賀（城）へ赴任してこなくなつた（仙台市史、2000）。また、都から派遣されていた国府（権限はほどんとなかつた）はえみし（蝦夷）のゲリラの襲撃を恐れて、陸奥まで赴くことを嫌って多珂城に駐在していたとさえ言われている（中津、1999）。一方、常陸国（茨城県北部）では征夷に関連し、陸奥への基地として活発な活動が行なわれていた（日立市、1994）。ともあれ、地震・津波の最も激しかった場所が陸奥国境であることと何ら矛盾しない。

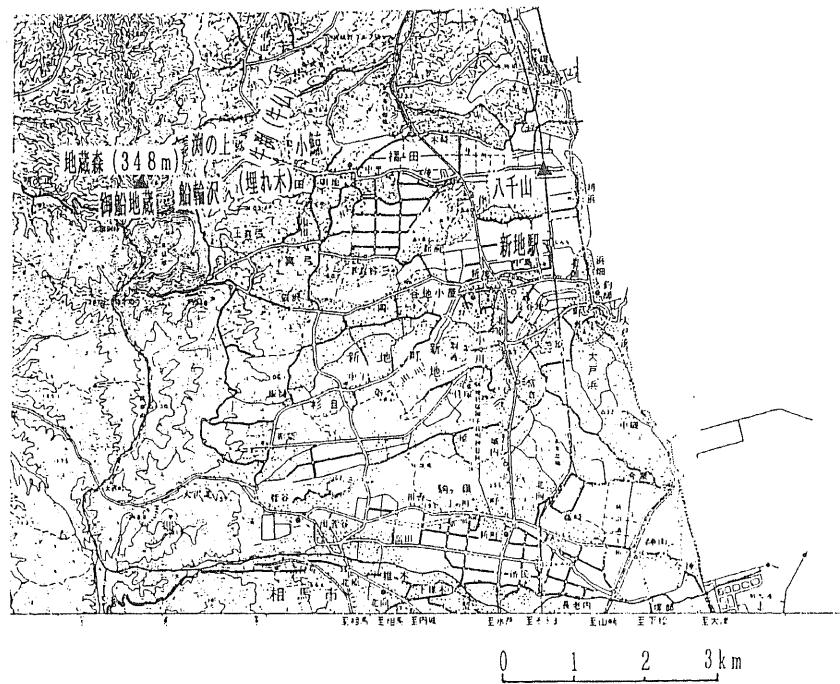


図－1 貞觀地震・津波によるものと推定される県、郡、市、町、村、旧町、旧村の各史
(誌)などから得られた伝承(丸印)とその地名
矢印は箕浦(2000)による津波堆積物の確認された場所

Fig. 1. Traditions(circles) of earthquake and tsunami occurred in 869(Jogan 11)
and the name of the place.
Arrows are the places of tsunami deposit by Minoura (2000).

§ 3. 津波伝承の成り立ちと信憑性

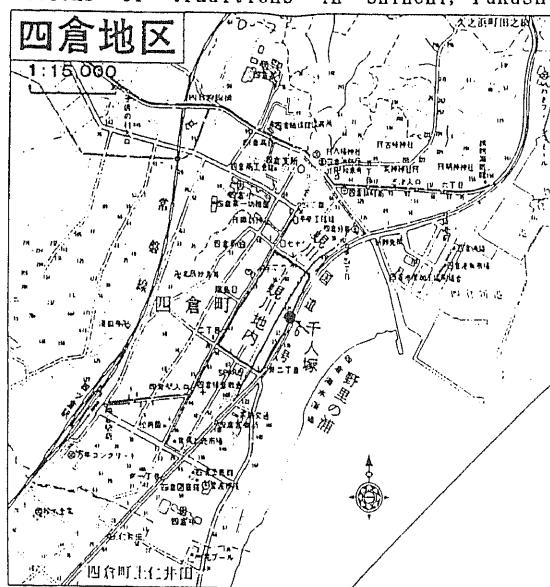
一般に、地元住民では実際にあったことを後世まで伝える「言い伝え」があり、これを受け継いで伝承され、伝承された話は物語・説話としてまとめられている。この中には最初の史実が変形されて実態が分からぬるものもあるが、場合によっては史実に近いものもある。これが後世に記録として残されている場合である。ここでは、これらの過程を伝承として取り扱うことにする。



図－2 福島県新地町の伝承の位置（地名）

なお、（埋れ木）は最も多く津波によると思われる埋もれた倒木が存在した場所

Fig. 2. The positions of traditions in Shinchi, Fukushima Prefecture.



図－3 福島県いわき市四倉地区の千人塚の位置

Fig. 3. The position of the tradition of Sennin-zuka, Yotsukura, Iwaki, Fukushima Pref.

伝承はとかく精度が悪く、自然現象の解明に利用できないという極端な考え方がある。しかし、伝承の成り立ち、信憑性および関連する他の資料があれば、実体が浮かびあがってくる。

津波伝承が残されている地域は津波浸水の最終到達付近が多く、小高い山、高台および丘は何らかの関係がある。村落の移転などにも津波伝承が含まれることがある。逆に津波常襲地帯では津波伝承は生まれにくい。これは次から次へと津波現象が頻繁に発生しているからであろう。

伝承の信憑性には次のいくつかの現象に注目する。すなはち、大津波であること、したがって、広範囲に津波現象が存在すること、疫病が広く流行していること、沿岸地域で発光現象が見られたかどうかなどである。小津波はほとんど伝承として残されていない。しかし、信憑性を判断する重要な要素に発生時期がある。発生時期の決め手となる資料がないからといって、信憑性を疑ってしまうことは問題である。過去の大津波のいずれかの時期として、精度が落ちても採用しておくことが必要である。他の関連する資料があれば浮かび上がってくる。なお、現在における学問の解釈と矛盾のないことも必要である。

なお、869（貞観11）年の地震・津波を例に、以上のこととふまえて、伝承が現象と関連しているか否かを詳細に解析する報告を現在準備中である。（渡邊、2001）

§ 4. 県、郡、市、町、村などの各史（誌）からの伝承（物語）など（付録一2、地名は図-1参照）

県史、沿岸とそれに近い郡、市、町、村、旧町および旧村の各史（誌）の中から、伝承（物語）を選び出した。これらの伝承は正史の記述と矛盾しないこと、つまり貞観地震・津波が発生した千年以上も前の年代であること、また大地震・津波であること、などを考慮したものである。調査した史（誌）料は岩手県が5か所、宮城県が33か所、福島県が15か所および茨城県が14か所の合わせて67か所である。得られた伝承は26となつた。このうち、宮城県気仙沼市大島は過去にたびたび発生した三陸沖を中心とした大津波の常襲地であるが、年代の新しい伝承が残らないで、古いものだけが残ったと推定される。この他、飯沼（1995）、茨城新聞編（1981）、草野（1977）、本多（1986）などにもいくつかの伝承が得られた。これらを図-1にプロットした。丸1つは伝承1つに対応する。この図から伝承はいくつかの沿岸地域にまとまっている傾向がある。この傾向は相互に関連し、その信憑性を高めるものであろう。なお、これらのほかいくつかの伝承があるが、発生時期が間違っていたり分からなかったので、採用しなかった（渡邊、2000）。まとまっている沿岸は次のとおりである。

1) 宮城県気仙沼市大島に数多く存在する。

2) 図-2にみられるように、福島県北部の新地町は数多くの伝承が狭い地域に集中している。図の（埋れ木）は伝承が多く存在するところに、8百年以上のものとも千年以上のものとも推定される埋れた倒木が多数存在する場所である（目黒、1999）。

- 3) 宮城県多賀城・仙台市から岩沼市にかけて存在する。
 4) 福島県南部のいわき市から茨城県北部の北茨城市にもいくつか存在する。このうち
 図-3の四倉地区の千人塚は明らかに存在していたと思われる〔福島県史(1969),
 いわき中央図書館(1999), 本多(1986)〕。

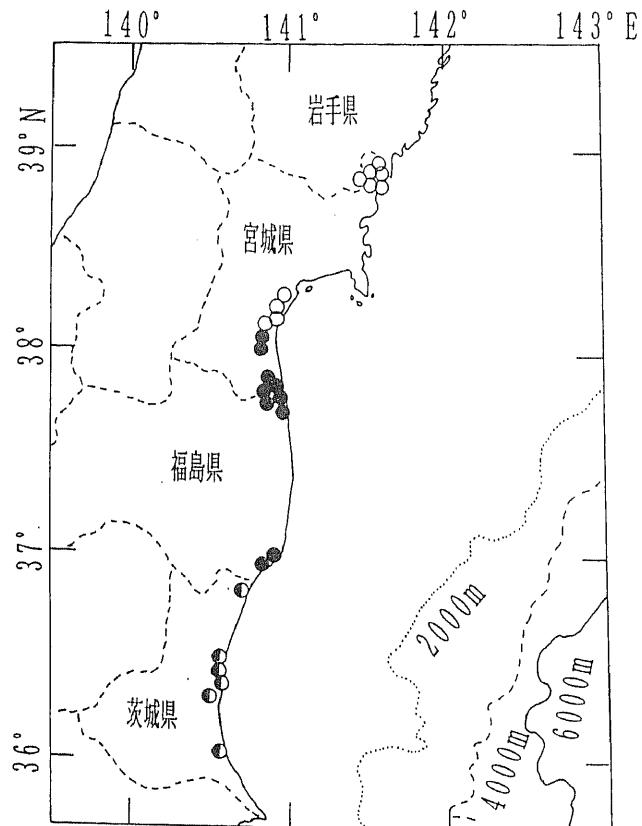


図-4 図-1の津波伝承の地域的特徴

- ：直接災害記述のないソフトな内容
- ：直接災害記述のある多彩な内容
- ：地震の発光現象を伴っている漂着神の内容

Fig. 4. The regional features of tsunami traditions of the Jogan tsunami.
 White circles : soft contents without tsunami damage,
 black circles : direct contents with tsunami damage,
 half black circles : God drifted ashore, with radiation by the earthquake.

5) 茨城県東海村から大洗町にもまとまっている。茨城県の伝承は漂着神といわれ、海上にあった石など（神仏の変身）が海岸に漂着し、これが神社、観音などとして祭られているものである。この伝承には発光現象の記述が多く、漂着神と密接に関係している。

これらの伝承の内容から図-4に示される地域的な特徴がみられる。すなはち、宮城県気仙沼市大島から仙台市までは、災害に直接関係しないソフトな内容である。ところが、宮城県名取市から福島県いわき市までは、明確な災害が記述され、特に福島県沿岸では多彩な記述となっている。一方、茨城県沿岸では、地震によると思われる発光現象があり、海から漂着したと思われる石が（漂着）神として崇められ祀られている。これは地震の震央と津波の波源域と無関係ではない。

なお、松島成因説という奇妙な伝承がある。新収史料（1993）の「浦戸の今昔（三）」に「この島は中世以前は大島と称し、南は舟入島から西は州崎まで陸地であったが、貞觀十一年五月の大地震で陥没し、数十の島になった」とある。ところが、「浦戸の今昔（三）」（鈴木、1980）にはこの記述はどこにもない。また、この他の史料（文献）にもなく、この伝承は存在しない。これに関連していると思われる続岩沼物語（佐々木、1967）に、「（1）貞觀の大地震・大津嘯（中略）この津波での溺死者は一千三百余人といわれる。ちなみに、松島の八百八島が出来たのもこの地震のためで、陸地の柔い所が陥没し、籠島明神の赤鳥居等が海底に没し、漁士がこの上を通るのに恐れおののき廻りみちをしたという。しかし松島の成因は、この地震のためばかりでないと科学者は説明している。」とある。このなかの籠島明神（神社）がある籠島は、塩竈港の沿岸にあって現在は埋め立てられ陸続きとなっている。したがって、この伝承は疑わしい。なお、松島の成因は貞觀地震のためであるという地質学者の学説は、ほとんど存在しない。

§ 5. その他の資料

1) 津波堆積物からの検証

図-5は宮城県仙台市と福島県相馬市において、箕浦（2000）がおこなった津波堆積物の調査の結果である。

横軸は現在より3000年前（いずれも炭素年代）までの地表面からの地質柱状図である。仙台市の堆積物を見ると、貞觀津波の後に火山灰層が堆積している。早川・他（1998）によれば、十和田湖火山が915年に、北朝鮮と中国国境の白頭（ペクト）山が947年に大噴火（噴火クライマックス）したという。したがって、少なくとも十和田湖火山の火山灰層が存在したことは間違いないようである。この層以前に、貞觀津波のものと思われるかなりの量の砂（津波堆積物）の存在が明瞭に見られる。

また、福島県北部の相馬市近郊における掘削調査の結果、厚さ1cmの淡灰色層と、薄い腐植泥を介在して下位に厚さ2cm程の砂層が発見されたという。砂層は、海生で内部に級化が認められず、これより下位にも腐植泥が堆積していることから、津波堆積物と判断された。この火山灰層は仙台市で確認された新期灰色火山灰層と鉱物学的にほぼ完全に

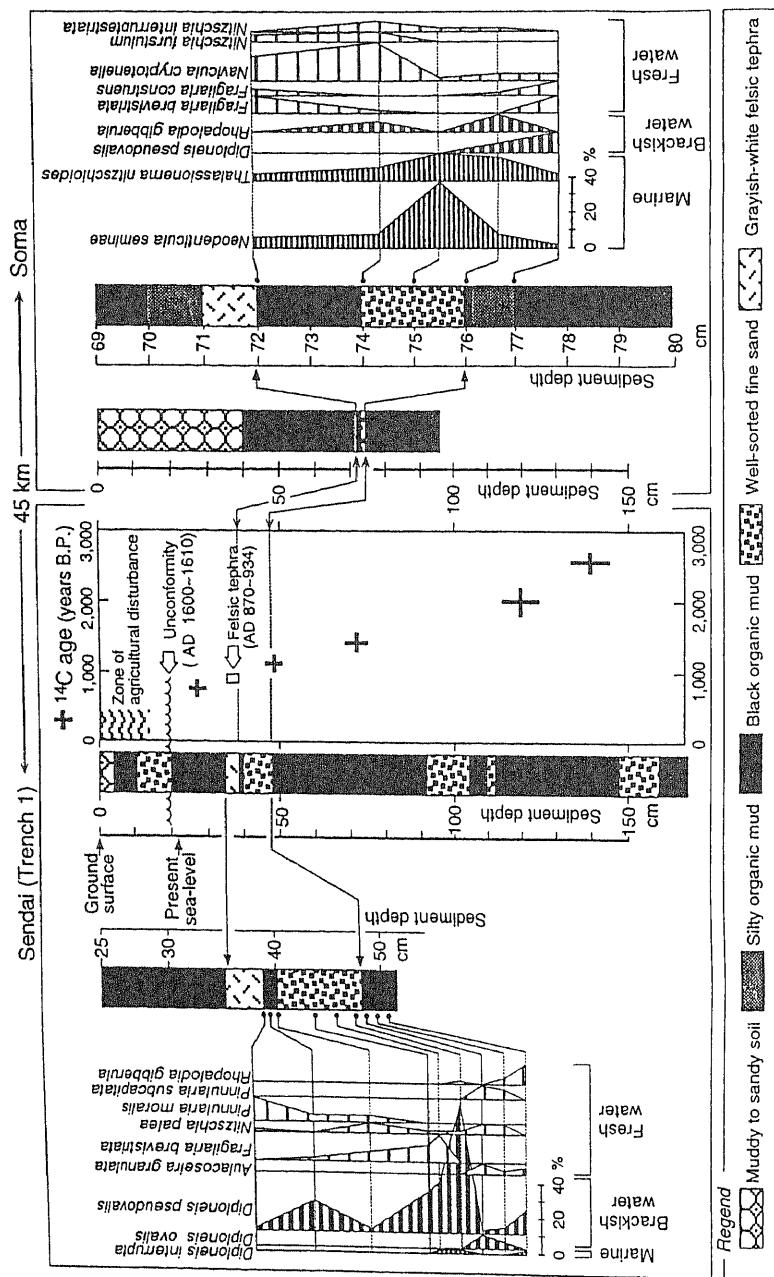


図-5 宮城県仙台市および福島県相馬市における、現在(0年)から3000年前(炭素年代)までの地表面からの津波堆積物(糸浦, 2000)

Fig. 5. Geological columnar figure of the Jogan tsunami deposit at Sendai and Soma, after Minoura (2000).

対比され、したがって、下位の砂層は、貞観津波による堆積層と結論された。この結果、少なくとも仙台市から福島県北部沿岸にかけて、広範囲に津波の襲来があったことはほぼ間違いないようである。

2) 相馬藩の史料

相馬藩世紀の利胤朝臣御年譜〔新収史料（1993），岩崎・他，1999〕に「十月二十八日海辺生波ニ而相馬領ノ者七百人溺死」とある。これが事実とすれば大変な被害である。年月の記載から、慶長三陸津波と考えられるが、これに関係する記述は相馬藩世紀の本文にはどこにも見当らない。津波記事のあとには、相馬藩の居城となる中村城の大規模な改築の記事ばかりである。このほかの史料を見ても、これに関連する記事は全く見当らない（今野，1979）。

仮に房総沖津波とすれば、1677年や1953年の津波記録から判断すると、相馬領に大津波が襲来した可能性は少ない。また、チリなどから襲来した遠地津波とも考えられない。すると、慶長三陸津波時、過去に発生した大津波の記録をたまたま伝承として残しておいたのかも知れない。結局、津波堆積物の調査結果からも、宮城県岩沼市の千貫松伝承と似ているがあるので、貞観津波の可能性は十分考えられる。

§ 6. 津波の波源域

実録、伝承、津波堆積物などから、宮城県から茨城県沿岸までと、津波の襲来があったものと推定される。

図-6は以上を総合して推定した津波の波源域である。これは日本海溝に沿って宮城県るか沖から茨城県北部はるか沖にかけて長さ約200km、幅約50kmである。図から分るように、この波源域の南部は陸奥国境に最も近く、約160kmの距離である。実録にも記述されている発光現象が茨城県伝承に数多く現われていることから、この津波の波源域の南部（陸奥国境はるか沖、37°N, 143°E）で最初に大地震（震央）が発生し、これから断層が北ないし北北東へ走ったと推定すると、各県の津波現象と調和する。

震度6の範囲を円と仮定し、 r を震央から震度6を観測した地点までの距離（半径、 r km）、 M を地震マグニチードとすると、 $\log r = 0.68M - 3.58$ （村松、1969）である。陸奥国境を震度6とすると、 $M = 8.5$ となる。この値は今まで三陸沖で発生した地震のうちで最も大きい。

§ 7. まとめと検討

以上をまとめてみると、次のようになる。

1) 実録から、陸奥国境に於いて地震が最も激しく、津波も大きかった。この場所は福島県南部から茨城県北部の沿岸であろう。

2) 岩手県南部沿岸から茨城県沿岸までの県、郡、市、町、村、旧町、旧村およびいくつかの著書から、伝承を選び出した。その結果、貞観地震・津波と思われるものは26あ

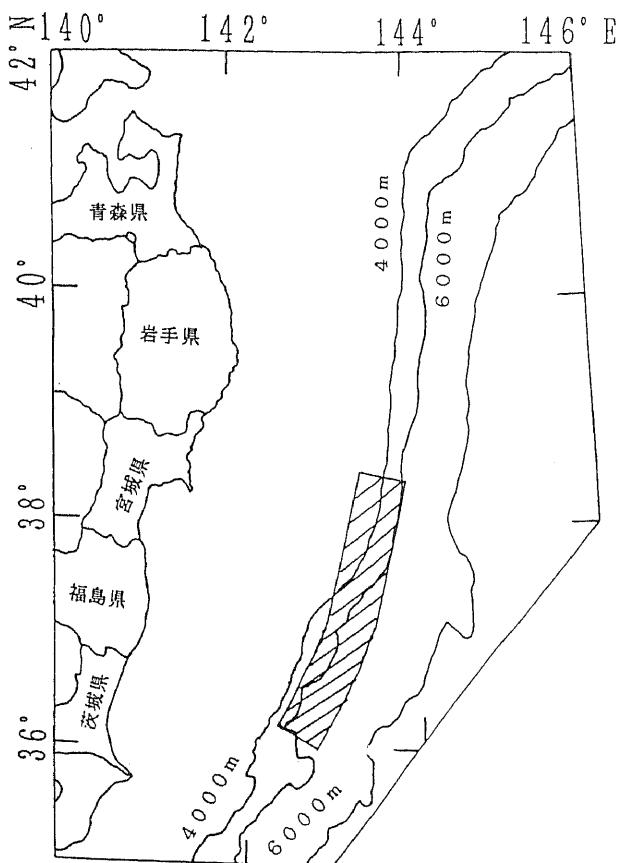


図-6 貞観津波の波源域

Fig. 6. Tsunami source area of the Jogan tsunami

った。これらはいくつかの狭い地域に集中しており、宮城県気仙沼市大島、仙台市から岩沼市、福島県北部新地町、福島県南部いわき市から茨城県北部北茨城市および茨城県東海村から大洗町にまとまっている。この伝承は宮城県仙台市以北の直接災害記述のないソフトな内容、茨城県沿岸の発光現象を伴った漂着神現象、両沿岸の間の沿岸の直接多彩な災害内容となって、興味ある地域特徴が見られた。

3) 箕浦(2000)によれば、貞観津波と思われる津波堆積物は仙台市と福島県相馬市に存在している。また、相馬藩世紀の津波被害記事は貞観津波の可能性が強い。

4) 津波の波源域は宮城県はるか沖から茨城県はるか沖にかけて、長さ約200km、幅約50kmと推定される。震央の位置は陸奥国境はるか沖の北緯37°、東経143°

が妥当なところであろう。今回求められた震央の位置と津波の波源域は過去に見当らない

なお、津波を発生させた地震マグニチードは8.5で、今まで東北地方太平洋側で発生した地震のうち最も大きい。

唯一の正史の新しい事実（解釈）と広く分布している伝承とは互いに矛盾するところはない。伝承の精度に問題はあるにしても、千年以上も前の現象で当時の社会・政治的背景を考えると、伝承は正史を十分に補って余りあると云えよう。

伝承は今後もまだ発掘される可能性は大きい。更に発掘を行なって、伝承の精度を高め、貞観地震・津波の実態に迫りたい。

なお、伝承の精度を含め具体的に伝承を解析する調査を準備中なので、其の結果をまつて問題点を議論したい。

謝辞

東北大大学箕浦教授には津波堆積物の調査結果を心よく提供され、本研究に適切な助言を戴いた。厚くお礼を申しあげる。

また、福島県新地町教育長目黒美津英氏には現地調査のご案内と貴重な資料の提供を受けた。宮城県岩沼市図書館と福島県いわき市中央図書館の担当者から新しい資料を戴いた。宮城県、福島県および茨城県の各図書館の方々にもご面倒なお願いを快く引き受けていただいた。これらの方々に深く感謝する。

文 献

阿部寿・菅野喜貞・千釜章、1990, 仙台平野における貞観11年（869年）三陸津波の推定、地震、第2輯、43, 513~529.

千釜章・多田章一郎・青沼正光、1998, 下北半島における津波の伝承とヒバ林の成因、地震、第2輯、51, 61~73.

藤田稔、1973, 日本の民族 茨城、260~263.

藤原仁、1995, 福島県における津波の記録（案、印刷されず）、1.

福島県史編集委員会、1969, 福島県史、24, 588~589.

羽鳥徳太郎、1998, 貞観11年（869年）宮城県多賀城津波の推定波源域、月刊海洋、号外No15, 167~171.

早川由紀夫・小山直人、1998, 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日一十和田湖と白頭山一、火山、43, 403~407.

日立市編さん委員会、1994, 日立市史、上巻、190~197, 210~216, 827 pp.

本多徳次、1986, 四倉の歴史と伝説、いわき北部史、97~98.

- 茨城新聞編, 1981, 茨城の史跡と伝説, 160~162.
- 茨城いすゞ自動車編, 1990, 不思議な石, 茨城の自然探訪知りー図, ふるさとの昔ばなしNo. 2, 30, 70 pp.
- 飯沼勇義, 1995, 第3章 貞観津波と仙台平野, 仙台平野と歴史津波, 宝文堂, 76~103.
- 今村明恒, 1934, 1. 三陸沿岸における過去の津波に就て, 地震研究所彙報, 別冊1号, 昭和8年3月3日の三陸地方に関する論文及報告, 第1編, 論文, 1~16.
- 今野美寿, 1979, 相馬藩政史, 上巻, 東洋書院, 32~37.
- いわき市中央図書館, 1999, 担当者の私信による.
- 岩崎敏夫・佐藤高俊(校訂), 1999, 相馬藩世紀, 第一, 利胤朝臣御年譜, 14.
- 草野日出雄編著, 1977, 写真で綴るいわきの伝説, ヤマニ書房, 28~29.
- 桑原滋郎・高野芳宏・滝川ちかこ・千葉孝弥・菅原弘樹, 2000, 多賀城の世界—発掘調査四十年—, (株)ヨークベニマル, 303 pp.
- 目黒美津英, 1999, 現地調査で口頭説明.
- 箕浦幸治, 1990, 東北日本における巨大津波の発生と周期, 歴史地震, 第6号, 61~76.
- Minoura K. and S. Nakaya, 1991, Traces of tsunami preserved in inter-tidal lacus trine and marsh deposits: Some examples from northeast Japan, Jour. Geology, 99, 265~287.
- 箕浦幸治, 2000, 私信による.
- 村松郁栄, 1969, 震度分布と地震のマグニチュードとの関係, 岐阜大学教育学部研究報告, 自然科学, 4, 168~174.
- 中津攸子, 1999, みちのく燐々—消されていた東北の歴史, 新人物往来社, 207 pp.
- 新村出編, 1991, 広辞苑, 岩波書店, 1010.
- 佐々木喜一郎, 1967, 岩沼の災害志, 続岩沼物語, 286~287.
- 仙台市史編さん委員会, 2000, 仙台市史, 通史編2, 古代 中世, 501 pp.
- 鈴木寛蔵, 1969, 浦戸の今昔(三), 塩釜市浦戸諸島開発総合センター, 117 pp.
- 高橋克彦, 2000, 火炎 北の燐星アテルイ (上) 438 pp. および (下) 484 pp.
- 武田裕吉・佐藤謙三訳, 1986, 訓読日本三代実録, 臨川書店, 1184.
- 東京大学地震研究所編, 1993, 新収日本地震史料(本文で新収史料と略称), 続補遺2および43.
- 渡邊偉夫, 1998, 869(貞観11)年の地震・津波の実態と推定される津波の波源域, 歴史地震, 第14号, 83~99.

渡邊偉夫, 2000, 869 (貞觀11) 年の地震・津波と推定される津波の波源域, 津波工学研究報告, 第17号, 27~37.

渡邊偉夫, 2001, 伝承の信憑性と精度についての検討—869年(貞觀11)年の地震・津波を例として—. (準備中)

以上のほか、県、沿岸とそれに近い郡、市、町、村、旧町、旧村の各史(誌)を参考にした。(数多いので省略)

付録-1 「日本三代実録」 (武田・他訳, 1986)

貞觀十一年五月

二十六癸未、陸奥国、地大に震動りて、流光昼の如く隠映す。頃之人民叫呼び、伏して起つ能はず、或は屋仆れて死に、或は地裂けて埋れ殞にき。馬牛は駭き奔りて或は相昇り踏む。城郭倉庫、門檻牆壁の頽落れ顛覆るものは其の数を知らず。海口は哮吼えて、声雷霆に似、驚濤涌潮り、沂回き漲長りて忽ちに城下に至り、海を去ること數百里、浩々として其の涯を辨へず、原野も道路もすべて滄溟と為り、船に乗るに遑あらず、山に登るも及び難くして、溺れ死ぬる者千許、資産も苗稼も殆ど子遺無かりき。

同年九月

七日辛酉、(中略) 従五位上行左衛門権佐兼因幡權介紀朝臣春枝を陸奥国の地震を檢する使と為しき。判官一人、主典一人。

同年十月

十三日丁酉、詔して宣ひけらく、『(中略) 如聞、陸奥国境に、地震尤も甚しく、或は海水暴に溢れて患と為り、或は城宇頻りに圧れて殃を致すと。百姓何の辜ありてか、この禍毒に罹ふ。憮然としてはじ懼れ、責深く予に在り。今使いを遣りて、就きて恩くを布かしむ。使、国司と与に、民夷を論せず、勤めて自ら臨撫し、既に死にし者尽く収殯を加え、其の存ける者には詳に賑恤を崇めよ。其の害を被ること太甚だしき者は、租調を輸さしむるなかれ。齷齪孤独の、窮して自ら立つ能わざる者は、在所に斟量して厚く支え済くべし。務めて衿恤の旨を尽し、朕親ら観るが如くならしめよ』と宣り給ひき。

付録-2 県、郡、市、町、村、旧町、旧村の各史(誌)などからの伝承

1) 宮城県気仙沼市大島

島分裂、船こぼれ (大島誌, 1982, 744頁より)

大島は津波のときはいつも大きな被害を受けていた。いつの頃の大津波の時か、島は三つに分断されたという。田中浜から浦の浜へ、そして小田の浜から朝根浜へと津波が通り抜け島は三分されたという。そのとき島内に灯があったのは休石屋敷一軒だけだったといわれている。

休石 (大島誌, 1982, 713頁および744頁より)

古来ノ伝説ニ曰ク、昔大津波アリ。滔々トシテ丘ニノボル。全島殆ド漲濤の侵ストコロ

トナリ、火アル者ハ休石アルノミ。人々多クココニアツマル故ニ休石ト称ス。〔津波記念碑（長崎）〕光明寺の東の入り口が休石である。

船こぼれ（大島誌、1782, 744頁より）

その休石のすぐ前の畑に「船こぼれ」と呼ばれる畑がある。津波で押しあげられた船がここに留まった所とされている。

鯛の下、合殻（がつから）（同 上）

竹の下の地名ももとは「鯛の下」で、やはり津波のとき鯛がうちあげられた所、合柄は「合殻」で大量のかき殻の打ちあげられた所と云い伝えがある。

2) 宮城県多賀城市

末の松山（宮城県史、1973, 229頁より）

二百年前の安永元年頃、老松が九本あったとある。昔、この里に相愛の男女があつて松の根元で時々会つていた。ある時、女は「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山浪も越えなむ」と詠んで男に示して喜ばせたが、幾ばくもなく女は他の男に走った。当時、多賀国府に在任中の清原元輔が失恋した男に代つて詠んだのが「ちぎりきな形見に袖をしづれつつ末の松山浪越さじとは」であった。この歌が京に伝えられて失恋することを浪越し男、女を浪越させ女といったという。

猩々ヶ池（多賀城市、1986, 3, 114~115頁より）

八幡の上屋敷に「猩々ヶ池」と呼ばれる四、五坪ほどの池が田の中にあって、次の伝説がある。

昔、八幡の町に酒屋があり、あるとき髪が赤く、顔は朱色をした異人が来て、酒を大量に飲んで帰った。その後もたびたび酒を飲みに訪れて来たが、何処に帰るかはわからなかつた。村の若者衆がそれを殺そうとたくらんでいたのを、酒屋の近くに住む老人が聞き、異人を憐み訪れるのを待つてその事を伝えた。異人はそれでも酒が欲しいといって、酒屋で酒を飲んで帰つた。待ち受けていた若者衆がそれに深手をおわせた。異人はようやくの思いで老人の家を訪れ、私は間もなく死ぬであろう、屍は町の東南にある池に棄ててくれ、今日より六日後にこの池に大津波がおしよせるが、そのときは末の松山に登つて難を避けよ、といい遣してこときれた。老人は言われたとおり屍を池に棄てた。はたして六日後に津波がおしよせ村はことごとく波に飲み込まれてしまった。老人の一家は末の松山に逃れることなきをえた。『塩松勝譜』

この伝承は飯沼（1995, 82~86）に、「小佐治物語」としてほぼ同じ内容で書かれている。

3) 宮城県仙台市

藤塚（仙台市史、1952, 211頁より）

名取河口の右岸の閑上は、もと里浜と称し船着場であった。昔、里浜の橋浦に茂左衛門という者があつて、ある日のことなぎさに何かゆり上げられたものがあるので近づいて見ると藤の筏でその上に金色に光を放つ御神体がのつていた。この御神体を祀つたのが今

の湊明神で、藤の筏は川をへだてた中里浜に埋めて塚を築いた。それ以来里浜を閑上、中里浜を藤塚と呼ぶようになった。御神体は後に高館の那智山權現に納つたが、藤塚の方は貞山堀の西側の土手下に十坪ばかりの塚があつて、上に碑が立ち藤の古木十数株が生えている。おそらくは古墳であろうという。

湊神社はもともと水門明神と書いたが、近世になって里浜はしばしば大火に見舞われ、水門明神の御託宣に神名を地名にすれば火災が起こらないとあったので今のように、神名は湊に改めたという。

藤塚（宮城県史、1973、257頁より）

五柱の神が藤の筏に乗ってこの浜に上陸したといい、五柱神社がある。藤に根が生えて塚の上に茂り、下をくぐると疫病を除けるという。この藤の古木は左巻きで知られる。

五柱神社（同 上）

昔、閑上の浜に淘り上った藤の筏を埋めたという藤塚の南一町ばかりの所に在って、境内に藤の古い株が數株茂っている。この藤蔓の間をくぐると疫病にかかるないと云つて、子供を連れて参詣に来る人が多い。この藤は昔、五柱の神がこれも藤の筏に乗ってこの海岸に流れ着き、筏の藤に根が生えたものだそうで、土地では藤塚の地名は、これに因ったものだといつてある。この藤は普通のものと異って、みな左巻きである。（郷土の伝承）

4) 宮城県名取市（飯沼、1995、92～100頁より）

清水峯神社由緒 地名姓氏 その他（清水峯神社 大友氏所蔵）

小豆島村 戸口凡六十四神社一牛頭天王社所祭素戔鳴尊少将井稻田姫命三神一社伝云

清和天皇貞觀十二年自播州明石浦広峯本村ヨリ奉還シ之レヲ祭ルモノナリ

貞觀十二年播州広峯ヨリ分靈祭事

（中略）時ニ貞觀ノ頃ハ頻リニ疫病流行シ庶民大イニ苦シミケレバ当氏子ハ早久モ京都ニ至リ時ノ帝播州広峯ノ神徳ヲ信仰セラレ社殿ヲ祇園ノ地ニ御建立アリテ御祭祀アルヤ疫病忽チ止ミ万民大イニ安穏スルヲ得タリト云フ京師ノ思念又愈々増進シ來リ等シシク之レニ倣ハントス一同ニ議リテ曰ク当鎮守素戔男命ト武内宿禰東國ノ安穏祈誓ノ為メニ此所ニ祭祀セラレシ次テ日本武尊モ東夷征伐ノ祈願アラセラレテ厚ク給ヒシ故事存ジレドモ如何セン其ノ年間久シク世ノ盛衰ニ連レテ其ノ止ハン事ナキ神社モ如是有無ノ間ニ座々ニ至レルハ恐レ多シ小豆島ハ始メテ武内宿禰ノ舟ヲ着セラレシヨリ続イテ日本武尊モ上陸有ラセラレタルヲ似テ又当所ヨリ初メテ開キタリト云フ因テ今モ当社ノ裏ヲ中道ト云ヒ其レヨリ山手ニ行ク道ヲ米田道ト云フ之レヨリ山ニ浴ヒテ道路ヲ通ジタリト云フ

当社ノ南三丁斗リノ所ニ沖道橋ト云フモアリ其ノ南手ニ来着崎ト云フ所アリ今狐崎トモ云ヘリ

5) 宮城県岩沼市（宮城県史、1973、21、228頁より）

千貫松

昔は赤松の大木の林で、沖の漁船の目標になっていた。ある時、国府で用材として伐ることになったが、目標を失うことを恐れ価千貫を納めて伐ることを止めてもらったので、

千貫松と称した。貞観十一年の陸奥の大津波には、船をこの山のふもとの松につないで村民は助かったという。

6) 福島県新地町

船越地蔵（新地町史、1993、自然・民族編、380～381頁より）

福田の地蔵森山（標高三四八メートル）の上に、御舟地蔵または船越地蔵と呼ばれる石の地蔵さまがある。この地蔵さまは、東へ四キロメートルも離れた山ろくの船越沢というところに鎮座していたが、むかしこの地方が大津波に襲われたとき、船に乗ってこの山頂へ遷座したという。土地の人は、これを奇瑞（きずい）としておまつりしているが、ことに漁師の人たち信仰されている。

小鯨（同 上）

明地に近いところに、小鯨というところがある。これは大津波のとき鯨が寄ったところだという。

八千山（同 上）

新地駅の北の作田に八千山という小高い山がある。やはり大津波のときこの山に登って八千人（多数の意）の人の命が助かったと伝えている。この山の上には山神さまが祭つてあるが、常磐線開通のとき山を二つに掘り切ったので、山自体は原形をとどめていない。

淵の上、埋れ木（目黒、1999）

津波が到達したことを示す丘を淵の上といっている。この地域一帯には多数の埋れ木があり、八百年以前のものとも千年以前のものとも云われている。現在家屋の柱として使われている家がある。

7) 福島県相馬市（岩崎・他校訂、1999、14頁より）

溺死

「十月二十八海辺生波ニ而相馬領七百人溺死」

8) 福島県いわき市

大仏石（いわき市史、7、1982、534頁より）

四倉町上仁井田にある、大仏石と呼ばれる立石は、海より上った石だといい、次第に成長すると昔からいわれて、現在は二メートル以上になっている。この石に子育ての健康祈願をする者が多いのは、この石のように丈夫で育つようにとの意味からである。祭礼は八月十五日。

大仏石（福島県史、24、1967、559頁より）

いわき市四倉町上仁井田に大仏石という、海から上った石だといわれる立石がある。この石はしだいに成長する石だと昔からいわれていて、現在では二メートル以上になっている。この石に子育ての祈願する者が多いが、この石のようにじょうぶで育つようにとの意味からだという。祭りは八月十五日である。

大仏石（草野編著、1977、28頁より）

仁井田の岸前に小林家があり、この家の裏には大仏（でえぶつ）石という大きな石が祠

に祀られている。伝えによると、昔、この地方に大津波があったとき、海からあがった石がたんぽのなかをゴロンゴロンと転がって来て、岸前の山麓でとどまった。

ところが、この石は次第に成長したので、地元の人たちは大仏如来が石になっておいでになったのだと崇め、八月十五日に供養するようになり、いつとはなしに『でえぶついし』といわれるようになった。

千人塚（いわき市史、1982、548頁より）

昔津波があって、野里の浦に多数の死体が集まったのを、付近の松林内に埋めて、塚を築いたのが今の千人塚で、蜆川地内にある。

千人塚（福島県史、1969、24、588～589頁より）

狐や蛇が埋まったという塚の話もだんだん現実に近い話になって、千人塚などという塚の話も生まれてくるのであろうか。いわき市四倉町の野里の浦（四倉海岸を昔はこういった）に、昔大津波があって、多数の死体が集まったくのを近くの松林に埋めて塚をきずいたのが、今は千人塚と呼ばれている。現在は新国道六号線ができる分からなくなった。

千人塚（本多、1986、97～98）

永正年間（1505－1520）今から四百五、六十年前のこと、大浦全域の亘り津波が来襲し、民家の殆んどが流失し、死者が続出し、その遺骸を合葬したのが、千人塚である。後年明治の初期まで、海難者の慰靈祭を行った云われるが、時折書き替えられる墓標も朽ち果てゝ、今ではその跡形もない。大浦塩木村の地名が生まれたのも度々の潮來があったからと思われる。また大須賀 軒の書かれた塩木村誌の当初にも「本村古時蓋シ大野郷ニ属ス耕田寺縁記ヲ按スルニ永正年間海嘯アリ近隣諸村ヲ併セ民家悉く流滅ス、天文ノ頃海嘯猶來ル故ニ潮來村と名ツク後転ジテ塩木村ニ作ルト云ウ」とあり、その千人塚のあった場所は笠間藩が幕府の命を受けて、異国船に備えて海防訓練を行った大浦練兵場跡とされている。即ち「千人塚ハ仁井田浦ニアリ、年不詳ナルモ伝フル処ニ因レバ平常ノ干潮ト変リ永く続キ俄カニ沖間迄干セシトテ魚族ガ非常ニ群ガリ、狼狽シアルヲ見ルヤ沖間迄干セシトテ少カラジト不知不識遙カ冲合ニ至ル最中忽チニシテ荒レ狂フ怒濤ニ嘯カレ見ル見ル筵ノ巻クガ如ク渦中ノ人トナリ岸ニ打チ寄セラレ、千人ノ蒼生ガ哀レ死体トナリ、コノ靈ヲ葬ヒシ塚ヲ称シテ千人塚ト云シモノナリ、亦呼ンデ千人須賀トモ云ヒ今尚白砂推高ク青松モ一層高ク繁床シアル処ナリ、又此付近一帯ハ牧野家ノ連兵場ナリ」とある。

9) 茨城県北茨城市（藤田、1973、262頁より）

漂着神（花園神社）

華川町花園の花園神社は神体が海上から来たあわびという伝説がある。花園山の七滝の一つは沖合の亀磯に通じ、七滝にはあわびが住むという。

10) 茨城県那珂郡東海村

漂着神（豊受皇大神宮）（藤田、1973、260頁より）

東海村白方の豊受皇大神宮にある元禄十五年（1702）の記録に「元明天皇和銅二年、石上忽有光耀、其光直射于白瀧郷留矣」とある。

漂着神（虚空蔵尊）（藤田、1973、262頁より）

東海村村松の虚空蔵尊は海の彼方に神や仏のいる靈地があるという信仰の背景として漂着神伝説が語りつがれた。

1 1) 茨城県ひたちなか市

漂着神（天満宮）（藤田、1973、260頁より）

和田町に金兵衛なる者がおり、ある夜海辺を歩いていると岩の上に光ものがだったので、近づいてみると金の仏像であった。これは観世音の姿であったが、梅鉢の紋があったので菅公の像として天満宮に祀った。

漂着神（泗列磯前神社）（茨城いすゞ自動車編、1990、30頁より）

むかし、大洗に、海水を煮て塩つくりをしている老人がおりました。ある夜のこと、老人はいつものように床についたのですが、なぜか夜中に目がさめてしまいました。起きだして、海をながめていると、突然、不思議なことがおこったのです。空が一瞬燃えるようになっ赤になり、すぐまたもとの暗い空にもどっていました。（いったい、何がおったのだろう‥。）老人は、夜明けをまって浜辺へ出てみました。すると、波打ち際に、今までにみたことがない二つの石がたっていました。高さ三十センチメートルほどなのですが、いかにも神々しく見えるものでした。それ以外は、いつもと変わらぬ見慣れた海原でした。

老人は気になって翌日もその場所へいってみました。こんどは二つの石のまわりを二十あまりの小石がぐるりとかこんでいるのです。一つとして同じの石ではなく、中にはお坊さんのがけか袈裟をきたようにみえる石もありました。（あれ以来、不思議なことが続くなあ‥。）その晩、老人の夢の中に二人の神様があらわれ、こう云うのです。「われわれは、昔、この国をつくった大己貴命と小彦名命である。しばらく東の方へいっていたが、今またこの國の人々を救うためにもどってきたのだ。」老人は、早速、村人を集めてこの話をし、相談の結果、大小の石を二組に分け、一組を大洗磯前の丘に、もう一組は泗列磯前の丘に社をたて、まつることにしました。これが大洗磯前神社（大洗町磯浜）、泗列磯前神社（那珂湊市平磯町）創建のいわれです。

1 2) 茨城県東茨城郡大洗町

大洗磯前神社と平磯神社（茨城新聞、1981、160-162頁より）

齊衡三年の十二月というから、今をへだたること千百年の昔である。鹿島郡大洗磯前（現在茨城郡大洗町）に海水を煮て塩をつくる翁があった。ある時夜半に起き出して海を眺めると、ひときわあざやかな光明が空を焦がすかと疑うまでに照りかがやいていた。夜が明けて海岸を見れば、昨日まではなかった二つの怪石が波打ち際に立っている。高さは二つとも三十センチばかり、人の手でつくったものでなく、まさしく神のたくみと思われるような尊い姿をしていた。翁はいたく怪しみだが、手でさわることさえはばかれて、そのまま家に戻った。その翌日また浜に出て見ると、新たに二十あまりの小石が二つの石の左右にひざまつくように並んでいる。石は異なる色彩を施してあって、中には袈裟法衣をつ

けたように見える僧形のものもあった。しかしそのいずれにも年月などは書かれていた。塩焚きの翁はただいぶかしさに目を見張るばかりであった。

その夜、神がある人についていわれた。「われは大己貴命と小彦名命である。昔この国を造りなして、去って東海に往ったが、今また民を済うために帰つて来たのである」と。人々はおそれかしこみて、これら大小の石を二た組にわけ、大洗磯前と、川を隔てた那珂郡平磯（今の那珂湊市）の酒列磯前に社殿を營んで祭つた。このことは六国史という朝廷の公式記録の中の文徳実録に“常陸上言す”として載せている。

漂着神（大洗磯前神社）（藤田、1973、260頁より）

大洗町の大洗磯前神社について「文徳実録」の齊衡三年（856）の条に「夜半望海、光耀属天、明日有両恵」とあり、平安時代漂着神の伝承があつたことがわかる。

漂着神（大洗磯前神社）（茨城いすゞ自動車編、1990、30頁より）

なお、この伝承は日立市史（1994、210～216）にも「磯に出現する神として書かれている。

漂着神（泗列磯前神社、なかみなど市）と同じ。

13) 茨城県鹿島郡大洋村（藤田、1973、262頁より）

漂着神（如意輪觀音）

大洋村汲上の如意輪觀音は海の彼方に神や仏の靈地があるという信仰の背景として漂着神伝説が語りつがれた。